（昭和22年1月15日第3種郵便物認可）　日刊新聞南　2018年（平成30年）10月18日（木）

藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

孫の澄んだまなざし
～日々の暮らしの中から④～

末っ子の長男は43歳。結婚して8年目に待望の男の子を授かる。嫁のご両親にとっては初孫、我々にとっても初の内孫。両親、両家の愛情を一身に集め、今年3歳になった。

孫の成長は我々の高齢化につながり、私より2歳下の妻も76歳に。それでも共働きの長男夫婦を少しでも助けようと、毎週1度、夕食の準備をしている。

10年前の脳梗塞の後遺症で左半身にまひが残る中で半日がかりで孫の弁当を中心に準備するのはかなり負担になる。「もう無理をするな」と言っても、「私の生きがい」だからと前日からメニューを考える。

孫が夕食を取りに来て笑顔を振りまいて帰って行くと、ぐったり。私も買い物と後片付けを手伝うが、妻の負担の方がはるかに大きい。しかし、こうして家族の絆（きずな）が深まることは間違いない。

大学で教えている長女は51歳で独身。NGO活動を含めて多忙だが、学生などを海外に研修に連れて行く度に孫への土産は忘れない。

今年のイギリス研修の旅からは、ロンドンの2階建てバスのおもちゃやイギリス王が描かれたTシャツなどが土産。長男も孫の3歳の誕生日は長女がイギリス出張中と知り、わざわざ帰国後に我が家で祝った。

料理上手な長女の今回の夕食は、イギリスの家庭料理「シェパーズ・パイ（羊飼いのパイ）」。ひき肉と野菜を煮込んで下に敷き、その上にマッシュポテトを載せ、オーブンで焦げ目をつけたもので、我が家でも初登場である。家族の絆は食事をともにすることが大切であることは言うまでもない。

昨夕も、夕食を取りに来た孫が「ご苦労さんです」とか「有り難うございます」と上手に言葉を使って我々を喜ばせてくれる。このところ、保育園のせいか、語彙（ごい）が増えた。我が家に限らず、孫の存在は家族の絆づくりに大きな役割を果たす。

新聞やTVのニュースでよく幼児虐待が伝えられるのには心を痛める。連れ子などいろいろな事情があるにせよ、子供もない。

孫を見て思うのは、その澄んだまなざしである。泣くことでしか意思表示が出来なかった赤ちゃん。少しずつ知恵がつき、自分勝手なことばかりではあるが、自己主張し始める。しかし、そのまなざしは澄みきって汚れがない。

一方、大人の自分はといえば、周囲の人にいろいろ配慮していながら、まなざしには何か淀（よど）みがある。これが長年生きて来た証ならば悲しい。高齢化するにつれ赤子に返るといわれる。淀みが消え、孫のような澄んだまなざしになれるよう残された人生を歩みたいと思う。

確かに反省だらけの過去ではあるが、振り向いて後悔しても何の役にも立たない。これからを清らかに生き、少しでも澄んだまなざしに自然になるような生き方をしたい。

いとこの赤ちゃんを上手に抱く